

ろうそくと貝がら

小川未明

青空文庫

一

海^{うみ}の近く^{ちか}に一軒^{けん}の家^{いえ}がありました。家^{いえ}には母^は親^{おや}と娘^{むすめ}とがぎびしく暮^くらしていました。けれど二人^{ふたり}は働^{はたら}いて、どうにかその日^ひを暮^くらしてゆくことができました。

父^{ちち}親^{おや}は二年^{ねん}前^{まえ}に、海^{うみ}へ漁^りに出^でかけたきり帰^{かえ}つてきませんでした。その当座^{とうざ}、たいへんに海^{うみ}が荒^あれて、難^{なん}船^{せん}が多^{おほ}かったといえますから、きつと父^{ちち}親^{おや}も、その中^{なか}に入^{はい}っているのだらうと悲^{かな}しみ嘆^{なげ}きました。

けれど、また、遠^{とお}いところへ風^{かぜ}のために吹^ふきつけられて、父^{ちち}親^{おや}はまだ生^いき残^{のこ}っていて、いつか帰^{かえ}ってくるのではないかといううな気^きもしまして、二人^{ふたり}は、おりおり海^{うみ}の方^{ほう}をながめて、あてなき思^{おも}いにふけていました。

「お母^{つか}さん、お父^{とつ}さんは死^しんでしまわれたんでしょうか。」と、娘^{むすめ}は目^めに涙^{なみだ}をためて、母^は親^{おや}に問^といますと、

「いまだにたよりがないところをみると、きつとそうかもしれない。」と、母^は親^{おや}も、さびしそうな顔^{かお}つきをして答^{こた}えました。

「ほんとうに、お父さんが生きていて帰つてきてくだされたら、どんなにうれしいかしれない。」と、娘はいいました。

「生きていなされば、きつと帰つてきなさるから、そう心配せずに待つていたほうがいい。」と、母親は娘をなぐさめました。

娘は昼間仕事に出て、日が暮れかかると家に帰つてきました。窓を開けると、かなたに青い海が見えました。静かに、海のかなたが、赤く夕焼けがして暮れてゆくときもあります。また、灰色に曇つたまま暮れてゆくときもあります。またあるときは、風が吹いて、海の上があわだつて見えるときもありました。

月のいい晩には、往來する船も、なんとなく安全に思われますが、海が怒つて、真つ暗な、波音のすさまじいときには、どんなに航海をする船は難儀をしたかしれません。

そんなとき、娘はきつと父親のことを思い出したのでありました。もし父親が、こんな嵐の強い晩に、海をこいで帰つてこられたなら、方角もわからないので、どんなにか難儀をなされるだろうと、こう考えると、娘はもはや、じつとしていることができませんでした。立ち上がって、窓からいっしんに沖の方を見つめていました。

二

父親ちちおやの行方ゆくえがわからなくなつてから、二人ふたりは、毎晩まいばん仏壇ぶつだんに燈火ともしびをあげて拝おがみま
した。

「お母つかさん、外そとはたいへんな風かぜですね。お父とつさんが、今夜こんやあたり帰かえつておいでなさるなら、
沖おきは荒あれて真まつ暗くらでどんなにお困こまりでしょうね。」と、娘むすめはいいました。

「そんなことはないよ。こんな晩ばんにどうしてお父とつさんが、あの船ふねで帰かえつておいでなさるも
のか。そんなことを考かんがえないほうがいいよ。」と、母ははおや親こたは答こたえました。

「だつて、帰かえつておいでなさるかもしれないわ。わたしは、お父とつさんが見当けんとうのつくよう
に、ろうそくの火ひを点ともしてあげるわ。」と、娘むすめはいつて、窓まどぎわに幾本いくほんとなく、ろうそ
くに火ひをつけてならべました。

なにしろ風かぜが強いので、ろうそくの火ひは幾いくたびとなく消けされました。けれど、娘むすめは消え
ると、点つけ、消きえると点つけて、沖おきから、遠とおく陸りくに燈火ともしびが見みえるようにと、熱心ねっしんにろ
うそくの火ひを点とほしていたのであります。

娘は、ついに家にありつたけのろうそくを燃やしつくしてしまいました。もはや、このうえは、遠く離れた町にまでいつて買つてこなければ、点けるろうそくはなかったのです。

「おまえの志は、よくお父さんにとどいたと思います。もうろうそくがなくなつたから、さあ休みましょう。」と、母親はいいました。

夜も、いつしか更けていました。娘もしかたがないと考えて、二人は戸を閉めて床に入ろうとしました。

そのとき、だれか戸をたたくようなけはいました。

「だれかきたようだ。」と、母親はいいました。

「ほんとうに、だれか戸をたたくようですね。いま時分だれだろう。きっと、お父さんが帰つていらつしたのですよ。」と、娘は勇んで、さっそく、戸口のところへ走つていきました。

「お父さんですか。」と、娘は叫びました。けれど、戸の外の人返答をしませんでした。

「どなた。」といいながら、娘は戸を開けました。すると、黒い装束をした脊の高い、

知らぬ男おとこが突つつ立たつていました。娘むすめはびつくりして、後あとずさりをしました。黒くろい装束しょうぞくの男おとこは、家いえの中なかへ入はいつてきました。

三

「あなたは、どこからおいでなされました。この真夜中まよなかに家いえちがいじやありませんか。」と、母親ははおやは驚おどろいた顔かおつきで、男おとこをながめながらいいました。

「いや、家いえちがいじやありません。じつはお父さんとつからの言ことつてがあつたのでまいりました。」と、黒くろい装束しょうぞくをした男おとこは、穏おだやかに答こたえました。

「え、家うちのお父さんとつからですか？」と、娘むすめはびつくりして、男おとこのそばに駆かけ寄よりました。「そうです。あなたのお父さんとつはいま、遠とほくにいられます。けれど、それはじつに暮くら

しいところおもです。あなたのお祖父さんじいも、いっしょに住すんでいられます。あなたが毎夜まいよ、思おもつていてくださることは、よくお父さんとつにわかつていますので、どうか心配しんぱいせずにいてくれるようにとのお言ことつてでございました。」と、その男おとこはいいました。

娘むすめと母親ははおやは、なおいろいろと、その男おとこに父親ちちおやの身みの上うえを聞きこうと思おもいましたが、

「今夜は、もう遅いから、いずれまたお伺いいたします。」と、男はいつて、袋に包んだものを差し出して、

「これは、ほんの土産です。私が帰った後でごらんください。」と、娘にその袋を渡して、男はこの家を出て、どこへか闇の中に消えてしまいました。

男が去った後で、娘は袋を開けてみますと、その中には、無数の金銀の粉が入っていて、目もくらむばかりでありました。二人は、いったいこれはなんだろうと不思議がりでしたが、夜が明けたらよく見ようといつて、床に就きました。

明くる日、二人はその袋を開けて子細に見ますと、金でも銀でもなければ、よごれた貝がらでありました。

「あれはきつと、きつねかなにかの化け物だ。こんな貝がらなどを持つて、おまえをだましてきたのだ。こんなものは捨てておしまい。」と、母親はいつて、袋の中の貝がらを、すっかり窓の外に投げ捨ててしまいました。娘は、二、三日たつて窓の外を見ますと、捨てた貝がらが、すっかり、美しいかわいらしい黄色な花になっていました。

その日から娘は、朝晩唄をうたいながら、その花を摘んで遊びました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「ろうそくと貝《かい》がら」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ろうそくと貝がら

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>